

東浦庄治の地代学説研究草稿—紹介と解説—（その1）

玉 真 之 介

農業生産流通学

（1990年11月25日受付）

目 次

1. はじめに……………	1	4. リチャード・ジョーンズとケリーの草稿について……………	9
2. 全体の概要と全体構想案……………	2	5. 東浦庄治草稿①「リチャード・ジョーンズの小農地代論」……………	10
3. 東浦庄治による地代学説研究の特徴……………	4	6. 東浦庄治草稿②「ケリーの地代論批評」……………	17
1) リカード理論の相対化……………	4		
2) 地代の歴史性と地代論—阪本楠彦の場合—……………	5		
3) 地代の歴史性と地代論—大内力の場合—……………	7		

1. はじめに

本稿で紹介しようとするのは、戦前に帝国農会の代表的理論家として活躍し、実践的にも帝国農会の幹事長として、戦後は農業界を代表する参議院議員として日本の農業団体史上に無視し得ない足跡を残した東浦庄治が、生前に書き残した地代学説に関する草稿である。これは後に示す全体の概要からも明らかのように、彼がいずれ1冊の著書にまとめるつもりで準備しつつあったが、1949年の死によって果たされず、そのままご遺族の手に残されていたものであり、ご遺族の了解を得て今後何回かに分けてその全体を公表しようとするものである¹⁾。

東浦庄治は、筆者が別稿「東浦庄治の日本農業論」『農業経済研究』第56巻第1号（1984年）でも詳しく紹介したように、戦後農業経済学の主流からは注目されなかったが、主著『日本農業概論』（岩波全書・1933年）をはじめとして日本農業の優れた研究を行い、とりわけ農業の資本主義化という戦後に支配的となるビジョンではなく、非資本主義的部分としての小農的農業が資本主義との諸市場関係において取る対応の諸形態に問題の焦点を定めていたという意味で、市場論的農業分析の先駆者的位置を占めるものであった²⁾。

そうした東浦にとって地代論がきわめて重要な理論的研究としての位置を占めたことは、今回紹介する部分だけでも明かである。そしてまた、それが半世紀近くもたった今日においてなお公表する価値があることについては、後の項で論じよう。ここでは改めて彼の経歴を簡単に紹介しておこう。

東浦が東京帝国大学経済学部を卒業し、帝国農会に入ったのは1923年（大正12年）である。その時、指導教官矢作栄蔵は彼に学部に残ることを強く勧めたが、東浦は「生家の経済的負担の加重を考えて³⁾」、帝国農会の調査事務の方を選んだ。それは帝国農会副会長でもあった矢作栄蔵が招いたものであり、「初任給九〇円、当時の農業界としては異例の待遇であった⁴⁾」という。これは察するに、矢作が東浦の研究者としての才能・能力を高く評価し、いずれ大学へ戻れるように研究の継続できるポストとしてそれを斡旋したものように考えられる。

こうして、東浦は帝国農会にあって『帝国農会報』等にきわめて水準の高い研究論文を次々と発表してゆく。地代論に関する論文を発表するのも、この大正末から昭和のはじめの時期である。そして、昭和農業恐慌が深刻化した1931年からは帝国農会内に研究会を組織して『日本農業年報』（改造社）を5年間にわたって10巻編集した。しかし、1933年、まさに農山漁村経済更生運動が開始され帝国農会も岡田温幹事長のもとに「自力更生」運動の先頭となるその時期に、なぜか東浦は産業組合中央会に転じ、資料の収集整備に従事することとなった。

実はこの時期の1935年に同郷の東畑精一が台湾帝国大学のポストを紹介しているが、東浦は大学へ戻って学者となる道を選ばず⁵⁾、翌1936年8月には岡田温の後を襲って帝国農会に幹事兼経済部長となり、1938年には幹事長となる。この岡田から東浦への帝国農会の陣容の変化は、明かに帝国農会における路線上の転換を暗示している。ともかく、東浦はこの時以後、1943年の農業団体統合まで系統農会の最高ブレインとして活躍しただけでなく、その間、栗原百寿をはじめとして優秀な左翼の研究者に組織内で仕事を与えた。

このような結果として、帝国農会は東浦庄治という存在を通じて単なる農政団体として留まらず、農業問題の学問的分析においても重要な役割を担うものとなったのである。しかし、それは学究肌の東浦にとってはきわめてストレスのかかる政治の世界での活動を強いるものでもあった。戦時下の農業団体統制、そして戦後の農業会解体という経過の中での激務が結果的に彼の寿命を縮めたといえる⁶⁾。

さて、こうした経歴の中で、先にも述べたように彼が地代論に関する論文を発表しているのは、20歳代後半から30歳前半頃の帝国農会にあって研究に専念できた頃である。それは、①「チュルゴー地代論の構成」『農業経済研究』第2巻第4号（1926年）、②「リチャード・ジョーンズの地代論」『社会政策時報』第87号（1927年）、③「マルクス絶対地代論批評」『農業経済研究』第5巻第2号（1929年）の3つであるが、これらはいずれも草稿の全体構想においても重要な位置を占めるものである。

しかし、今回公表する草稿はこれらを改めて書き直していたものであることが確認できるが、残念なことに日付等はどこにも見あたらず、執筆時期を確定できない。ただし、これらの論文が書かれた時期から遠くはなれることは、彼が次第に系統農会の行政の中心になっていったこと、また論文も時事的問題が中心になっていったことからいって考えられず、おそらくは1933年に産業組合中央会へ転ずるまでの時期に書かれたものと考えられる。

2. 全体の概要と全体構想案

東浦の地代学説に関する草稿は、全体で8つの大型封筒に入れて整理されており、それぞれに①「チュルゴー」、②「スミス」、③「リカード」、④「ジョーンズ」、⑤「ケリー」、⑥「ロー

トベルトス」、⑦「マルクス」、⑧「小農地代材料」と記されている。分量としては、チュルゴー、スミス、リカード、ケリーが多く、これは同じ項について数度書き直した原稿が含まれているためであるが、原稿の右肩に「完」と書かれているのは、ケリーとロートベルトスのものだけで、後はすべて未完成でチュルゴー、スミス、リカードについてはどれが最終稿であるかの判定も難しい。

また、チュルゴーとリカード、ロートベルトスの袋には、原書から抜き書きしたノートが含まれている。「小農地代材料」とある袋は、数枚ずつの書きかけ原稿と他は系統農会が実施した1926年と1927年の農家経営調査の個票の束である。ただ幸いリカードの袋の中に、「地代学説研究補遺」と題して、これらの草稿の全体構想案があったので、以下まずそれを紹介する。

地代学説研究補遺⁷⁾

緒論

第一部 リカード以前の地代学説

第一章 チュルゴーの地代論

第二章 スミスの地代論

第二部 リカードの地代論

第一章 リカード地代論と其の先駆

第二章 リカード地代論解説

第三章 リカード地代論批評

第四章 チューネンの地代論

第三部 リカード以後の地代論

第一章 リチャード・ジョーンズの地代論

第二章 ケリーの地代論

第三章 ヘンリー・ジョージの地代論

第四章 ロートベルトスの地代論

第四部 マルクスの地代論

第一章 マルクス地代論解説

第二章 マルクス対差地代論批評

第三章 マルクス絶対地代論批評

第五部 主観派の地代論と最近の地代論

第一章 シュラッテンホーファーの地代論

第二章 アルフレッド・マーシャルの地代論

第三章 オッペンハイマーの地代論

第四章 チャヤーノフの小農地代論

第六部

第一章 学説其物の発展

第二章 思想の展開

第三章 結章

先述のように、東浦の草稿にはどこにも日付が書かれておらず、執筆時期を確定できないが、ただ原稿用紙の裏に「七月ジョージ、八月ロートベルトス、マルクス、九月ブカナン、十月リカード、十一月シュレーレン・シラッテンホーファー、十二月マンゴールド、一月結章」と走り書きされており、一年ほどの計画でこの全体構想案に近い地代学説研究をまとめようとしていたことがうかがわれる。

この構想に対して草稿は、「チュルゴー」の袋が第1部第1章、「スミス」が第2章、「リカード」が第2部、「ジョーンズ」が第3部第1章、「ケリー」が第2章、「ロートベルトス」が第4章、「マルクス」が第4部をカバーすると一応考えられる。ともかく、東浦がきわめて包括的、かつ雄大な地代学説の研究を意図していたことは間違いなさそうであり、大きくバツ印が付けられてはいるが、ノートにある「緒論」という原稿には、「此の研究に於て私は下記の十□人の地代理論の正しき姿を把握し、一個の総合的な地代理論建設の礎石を築かんことを目的とする」と述べられているのである。

3. 東浦による地代学説研究の特徴

1) リカード地代論の相対化

そこで次に、そうした東浦による地代論研究の特徴を鮮明にすることにしよう。それは、同時に半世紀近く以前のこの草稿を今日において公表する意味を明らかにすることでもある。その際、東浦の地代論研究を一言で特徴づけるならば、それはリカード地代論への批判とその相対化ということが出来る。それは学説研究の全体構想がリカードを中心として、それ以前とそれ以後に分けられることにも示されているが、その問題意識をもっと端的に語っているのは、「小農地代材料」の袋に入れられていた「小農地代に関する理論的研究序説」と題する次の書きかけ原稿である。

小農地代に関する理論的研究序説

リカードの「資本主義経済」制度下に於ける「地代」理論に対する強力なる反対の一つが、リチャード・ジョーンズの「小農地代論」であったことは既に筆者の明示した所である。然しジョーンズも既に説き、最近チャヤノフ等も力説している様に、世界経済の重要な部分に於て、非資本家的農業経営が存立し、其処に特殊なる現象の存在する限り、其の現象に対する理論的説明も亦学的意味を有するものと称することが出来る。私は今、我国に行わるゝ小作慣行の示す小作料関係を検討することによりて、小農地代現象に一つの理論的説明を発見したいと思ふのである。小農地代は如何に観察さるべきものであるか。

然し我々は直ちに我々の分析的、実証的研究に進入する前にこの問題に関する先人の所説の二、三を検討して置かなければならないと思ふのである。よって、ジョーンズと、マルクスと、…… [以下空白]

この文章から、第一に、東浦は現実の日本農村の地主小作関係、小作料の理論的究明という強い問題意識から、農業における資本関係の支配を前提に組み立てられたリカードの地代論の地代理論としての普遍性に強い疑問を持っていたこと、第二には、非リカード的地代学説の中

から「小農地代現象に一つの理論的説明」を与える所説を得ようとしていたことが明かである。彼が地代学説の中でもリカードを批判して小農地代を展開したジョーンズと、やはりリカードを批判して絶対地代を展開したマルクスをとりわけ重視するのはそのためである。

そして、このことが、マルクスの地代論解釈を中心に山のように論文が積み重ねられた戦後の地代論研究を経てなお今日、東浦のこの半世紀も前の地代学説研究草稿を公表することの意味をも示唆する。すなわち、戦後の地代論研究は、マルクスを論じる場合も、その先駆者としてリカードを論じる場合も、そこに前提とされている資本主義による農業の支配という前提自体を反省する問題意識が欠落していたからである。いま、そのことをより一層明確にするために、戦後の日本農業研究に強い影響を与えた二人の論者の地代論、すなわち阪本楠彦と大内力両氏の地代論研究について若干の検討を行なっておこう。

2) 地代の歴史性と地代論—阪本楠彦の場合—

阪本楠彦は、近藤康男編『農業経済研究入門(旧版)』(東大出版会)の第1章「農業経済学の基本問題」において、「経済学一般から相対的に独立した科学としての農業経済学は、何よりもまず、農業の発展における土地所有の特殊な役割を研究する科学として、すなわち地代論として、歴史的には出発して⁹⁾」として、農業経済学の経済学一般からの相対的独立性を強調し、土地所有にかかわらせて地代論を農業経済学の出発点とする考え方を示した。

しかし、これには栗原百寿が『農業問題入門』において、「地代論はいうまでもなく経済学原理論の体系の一環であって、地代論を抜きにしては経済原論の体系が完結しえないものである。地代論は土地所有に関連するものであるから農業経済学にはいるというのであれば、剰余価値は工業経済学の領域で、流通過程の研究は商業経済学であるというようなことになって、経済原論の緊密な体系は勝手に分断され、破壊されてしまうであろう⁹⁾」と批判した。

これに対し阪本は、前掲書の「新版」において、「地代論はもともと、経済学一般の不可欠な一構成部分をなすものであって、これをとくに取り出して農業経済学の範囲に入れることは、若干の読者にとっては奇妙なことのようにも見えるかもしれない」とした上で、「が、そういった『ナワばり』論争は、がいして生産的なものではない。ここでは経済学が歴史的にみて最初に、農業に深くかかわりあったのが地代論の分野であったというだけの意味で、この問題を農業経済学の第一(歴史的な順序での第一)の基本問題だとして、とりあつかってゆこう¹⁰⁾」として、「マルクス地代論の、主要な命題」を解説している。

このような農業経済学の体系を地代論から出発させるという考え方は決して阪本に独自なわけではなく多数の論者に見られ、問題は農業経済学と地代論との関係如何という所にまで発展する。しかし、地代論を経済原論の不可欠の構成部分と認めるのであれば、日高普がやはり地代論を農業経済学の基礎理論と考える山田勝次郎を批判して「地代論はどのような意味でも農業論ではない」、「地代論のあつかうべきものは、制限された自然力の利用にともなう剰余価値配分の特殊な形態の論理である¹¹⁾」と述べているのは、議論としてはもっともである。農業も資本関係に完全に支配されているという非現実的な前提も、まさにそこに根拠を持っている。

しかし、間違っていないのは、経済原論の一部としての地代論だけが地代論なのではなく、現実の歴史具体的な地代現象を経験的・論理的に解明するものも地代論だということである。すなわち、地代現象というのは資本主義の発生以前から広範な形態で存在するという歴史性を

持っているのであって、そうした地代の歴史性を論理的に考察することもまた一つの地代論の重要なあり方に外ならない。東浦のこの地代学説研究の草稿で強く意識しているのもまさにそうした地代の歴史性であり、また栗原百寿が先の阪本批判に続けて、「もちろん、農業経済学ないし農業問題にとって、地代ないし土地所有は後にみるようにその基礎概念の一つである。しかし、その地代分析は経済原論における地代分析とは段階を異にして、地代の発展段階的な、それゆえまた過度的諸形態の研究を主眼とするものである¹²⁾」と述べているのも同様の意味である。

つまり、地代論と言った場合には、歴史的地代現象の経験的・理論的解明をめざすものと、経済原論の体系性を支える柱としてのそれとは、少なくとも次元の異なるものとして区別して論じられる必要があったのである。しかるに、それはマルクスにおいても、『資本論』第3巻第47章のように一応区別されてはいるが、両方の志向が必ずしも十分に整理されていないところに躓きの石があったように思われる¹³⁾。

阪本に改めて戻るならば、彼の場合はあたかも現実の地代現象の理論であるかのように、経済原論の中の非現実的な地代論を抜きだすことによって、結局二重の混乱を導くものとなってしまっている。つまり、一方ではあたかも農業分析の理論は経済原論の地代の部分で足りるかのように、本来の資本主義分析の一環であるべき農業分析がないがしろにされ、また他方では非現実的な前提に立つ地代論を出発点とすることで地代論と現実分析との溝を深くするだけのものとなっているからである¹⁴⁾。

しかし、このような阪本の問題の根源は、実はそもそもこの地代論の二つの次元を一体化させるいわゆる「農業の資本主義化」という理論的・歴史的認識の方にあることがわかる。すなわち、阪本は第二の基本問題として「資本主義と農業」という問題を取り上げ、「農業が工業とはまったく別の経済法則をもつと主張すること」は誤りであるとして、次のように述べている。

「カウツキーやローザにくらべての、レーニンの農業理論の特色は次の点にある。すなわち第一には、単純商品経済が資本主義と基本的には同じ形の経済であり、前者は時々刻々、後者をうみ出すものであることを論証した点¹⁵⁾」。

「レーニン以前に、マルクスも資本主義の発生を、理論的なものとして研究していたといえるだろう。『資本論』の第一巻は、単純商品経済と資本家経済とが同じ型の経済であり、前者が後者に必然的に転化することを、理論的に証明しているといつてよい(第一-二篇)¹⁶⁾」。

つまり、阪本においては、農業を広範に支配している小農民経済の内部に資本主義的關係が生まれてくる必然性があり、しかもそれらがレーニンとマルクスによっていわゆる「両極分解論」として証明されていると理解されているのである。単純商品経済が資本主義と同じ形の経済であり、前者が後者を時々刻々生み出しているのであれば、経済原論体系の一部の地代理論と現実の地代現象の理論とを区別する必要は生じず、資本主義の支配を前提とした理論が唯一の普遍的理論となることは必然である。

しかし、ソ連の『経済学教科書』に代表される『資本論』の第1, 2篇を単純商品生産から資本主義生産への歴史的転化の論証と解釈するいわゆる「論理=歴史」説にしても、またレーニンの農業の資本主義化論にしても、それらはいずれも修正主義(社会民主主義)やナロードニキとの政治闘争・イデオロギー闘争の過程で作られ出来てきた理論的にも実証的にも無理の多いイデオロギー的な議論であって、しかもスターリニズムのもとで極端に権威主義化された

ものであったといつて間違いないであろう¹⁷⁾。なぜならこの理論こそが、以下の阪本の論理的帰結が明瞭に示すように、富農を犠牲にしたスターリンによる農業集団化をプロレタリア権力維持の名の下に正当化するのに不可欠の理論だったからである。

「権力をつかんだプロレタリアートが、農村と商品流通をとおしてだけかかわりあっているかぎり、農民層の分化・分解は不可避であつて、農村には資本家的経営が発生してくる。プロレタリア権力の階級的基礎は、そのため、おびやかされざるをえない。権力がブルジョア的なものに変質するか？ それとも権力のプロレタリア性を保持するために、富農を抑圧するか？ 二者択一の問題がだされる¹⁸⁾」（下線一玉）。

さて、阪本も後の『地代論講義』（1978年）になると、「リカード理論で割り切れぬ地代現象が、イングランドに根強く残った¹⁹⁾」という問題をようやく取り上げ、「比例的地代」という新たな概念を提起している。そして、マルクスの絶対地代についても次のような新しい考えを示している。

「マルクスは絶対地代という範疇を——ブルジョアの土地国有によって消滅できるにしても——すぐれて資本主義的なものとして考えようとした。しかしその論理には無理があり、彼が絶対地代だと思ったものの正体は比例的地代であり、それは先資本主義的な地代思想の残存によって生みだされたものだろうと、私は考えたい²⁰⁾」。

ここからも明らかなように、阪本は比例的地代と名付けたリカード理論で割り切れぬ地代現象の根拠を地主の意識に求めている。すなわち、「資本主義的な合理的精神を身につけている人たちだけが土地市場に登場するのであれば——という大前提が、リカードの地代論にも、マルクスの地代論にもおかれていた²¹⁾」「比例的地代を成り立たせるような人間は、洗練されたブルジョア経済学に登場してくるような経済人ではない。…比例的地代の原理を守るためには損得のソロバンをはじかぬという地主が、登場人物なのである²²⁾」と。

つまり、問題にされるのは意識であつて、農業における生産関係ではない。阪本にあっては、小商品生産と資本主義とが相変わらず「基本的に同じ形の経済」と頭の中で区別できないために、非資本主義的な生産関係が農業を広範に支配していることとリカード地代論の前提との齟齬という問題におよそ思いが至らないのである。こうして結局、マルクスが現実の地代現象への志向性からリカード批判として展開した絶対地代論は否定せられ、阪本にあってはリカード地代論が唯一の地代理論とされるのである。

3) 地代の歴史性と地代論—大内力の場合—

大内力の場合は、その明晰な論理的思考によって、以上の問題はもっと単純明快な結果に導かれている。すなわち、大内にあっては「いうまでもなく地代は農業に特有な現象ではない」のであつて、「農業経済学は地代論から出発すべきだというような議論は²³⁾」およそナンセンスである。「『純粋な資本主義』を考えるかぎり、ただ農業にも工業その他の生産部門にも共通の一般的な法則性が明かにされるだけであつて、およそ農業の持つ特殊な問題は、そこには登場しようがない²⁴⁾」のである。

このような観点に立つ大内からすると、マルクスの地代論は実に混乱したものに見える。「だが、地代にかんするかぎり、こういうマルクスのリカードウ批判は、かえってかれを迷路に追いこんだようである。安易に歴史的事実を論理構成にもちこんだければ、かえって差額地代論

においては混乱に陥り、リカードのように簡潔にその基本的な法則性を浮かび上がらせることができなかつたのである²⁵⁾と。

こうして大内の場合、マルクスがリカードを批判するために方々に持ち込んだ歴史的事実を切り捨て、純粋に抽象的な論理的整合性だけに地代論を純化することに勢力が費やされる。

「たとえ歴史的発展がどうであろうとも、それがそのままで原理論の理論構成の前提になるわけではない。理論には、理論を展開するために論理的に要請される前提が必要なのであって、安易に歴史と理論の統一などといってすまされるものではないのである²⁶⁾」と。

こうして、差額地代については「むしろ歴史的事実はどうであろうとも、論理的には下向序列と収穫逡減を前提として、はじめて差額地代の成立を解明することができるといったほうが、正当であろう²⁷⁾」。その場合、土地所有については、「すなわち『資本論』のように原理的に問題を展開するばあいには、土地所有についても、それをたんに歴史的に与えられたものとして前提するわけにはゆかない。むしろ論理的には土地所有のないところから出発し、地代が展開されるなかで、その成立の必然性が論証されなければならないということ²⁸⁾」になるのである。また、「絶対地代は限界地についてだけ問題にされるべきだといえ、議論はよりはっきりするのである²⁹⁾」。

結局、大内の場合、マルクスの地代論はほぼ全面的にリカードの地代論へ引き戻されることになったわけである。その結果、あくまで大内が想定する「純粋な資本主義」においては論理的に矛盾のない体系として説明できたかもしれない。しかし、それはあらかじめ論理の都合に合わせて設定された前提、たとえば土地所有がないところから出発するといったものの産物ではないのか。現実の資本主義が土地所有を矛盾なく包摂しているなどとはとても言い得ない以上、そのような超現実的想定のもとで説かれた無矛盾の理論がいかほどの意味を持つものなのか率直に言って疑問なのである³⁰⁾。

これは、マルクスを含めて経済原論全体の対象を「純粋な資本主義」と想定するという方法論上の問題と考えることもできる。それを「生産論」の範囲に限定して、利潤率均等化を扱う部分は産業循環を通じてその「自立的」性格とともにそれ自身の限界と変質も明かにされるような「総過程論」として展開されるなら、それは理論と歴史が接触し合うものとして地代論の性格もかなり異なってくることになる³¹⁾。少なくとも、地代論を経済原論の一部として扱うとしても、その前提を「資本主義による農業の全面的支配」とするかどうかについては、原論体系の問題としても再検討が残されているように考えられる。

ともかく、マルクスが地代論を展開するにあたって歴史的事実に相当の執着をみせ、またそのところからリカード批判を展開していたということは、大内のように軽くは扱えない問題と思われる。こうして、大内の場合、阪本のように地代の歴史性と経済原論の地代論とをまるで区別できないのではなかったが、前者をいっさい地代論から切り捨てることで、それを純粋に観念的な論理の産物としてしまったのではないか³²⁾。

ところが、このような対照性にもかかわらず、両者が結果として落ち着いたところがともにリカードの地代論であるということは、興味深い点である。このことは果して地代論研究における進歩と言えるのであろうか、それとも退歩と言えるのであろうか。ともかく、こうした戦後の有力な地代論学説の現状がこうしたものであることが、リカード地代論をそれに対する批判の検討を含めて地代学説史に相対化し、そのことでまた歴史的な地代現象と地代理論の関わり

を究明しようとする東浦の地代学説研究の今日的意義を高めるものといえるのである。

4. リチャード・ジョーンズとケリーの草稿について

以上の意味から今回紹介しようとするのは、東浦の全体構想の第三部第一章リチャード・ジョーンズと第二章ケリーである。これは第三部が草稿の中でも原稿として比較的まとまっているという理由に加え、リカード地代論の批判とその相対化という東浦の地代学説研究の性格を最もよく現している部分だからでもある。

しかし、ジョーンズの草稿は、「第三部 リカード以後の地代論、第一章 リチャード・ジョーンズの小農地代論」と書き出され、全体構想に沿って書き始めていたことが明らかだが、結論から言うと肝心な部分を書きかけであり、未完に終わっている。東浦はまず序説として、これまで評価されることの希であったジョーンズが地代理論においてはリカード地代論の批判者としてマルクスが評価したものであることを紹介しながら、そのジョーンズ地代理論の最大の特徴が「地代の歴史性」の認識にあることを論じて行く。

すなわち、リカードにあっては農業が資本関係に支配されていることが前提とされているが、ジョーンズにおいては地代現象は一つの歴史的所産で土地制度や経済組織の違いに応じて異なっていると考えられているのである。こうして、東浦は、ジョーンズがリカードに対して独自に提起した小農地代の四形態の紹介に移ってゆくが、残念なことにそれは「労働地代」について若干の記述があるだけで、後は空白のまま書かれていない。ただ最後のまとめとしてジョーンズの小農地代が農民の自家労賃、すなわちその生活水準に最も強く規定されることに最大の特徴を求めている³³⁾。また、学説史的には東浦が第一部「リカード以前の地代論」で論じる予定のチュルゴの影響が看取されること、あるいはマルクスの絶対地代論にかなりの示唆を与えたこと、更に、その歴史学派的性格はジョン・スチュアート・ミルに引き継がれていること等を断片的ではあるが論じている。

そして、ここから本来の「ジョーンズに対する批評」が開始されるのであるが、それについては全く書かれていない。ただ幸い、先にも紹介したが、ジョーンズについては彼が『社会政策時報』に書いた論文があり、そこで彼のジョーンズに対する批評の論点は知り得る。

その第一は、ジョーンズがかくも厳しくリカード地代論を攻撃しながら、その一方で農企業者地代についてはリカードを全く認めており、またそれが次第に発達してゆくことも認めていることである。つまり、それではリカード批判は部分的なものではないということである。しかし、東浦は続けて、「だが、地代理論としてこれ等二つの理論に相当な真理が認めらるゝとするならば、更に問題は今日に於て、果して何れがより重要な地位を取っているかと言ふ姿に於て我々に巡って来る。即ち資本主義経済の発達に従って果して大農経営がより盛んに行はるゝに至ったか何うか³⁴⁾」と問題を提起している。

第二には、小農地代には差額地代的要素が無いかという点である。それは日本の封建時代にも上田、中田、下田などの区別があるところにも、この点の検討が不可欠であり、その意味で「ジョーンズは小農地代の独占的傾向を説くに急にしてその内容の分析を試みなかった所に、その欠陥を持っている³⁵⁾」としている。

ともかく、ジョーンズの分析を通じて現実的、歴史的な地代現象においては、土地所有、土地

独占による労働の搾取がきわめて重要な要素をなすことが論じられることによって、土地の豊度の差のみを根拠とするリカードの地代論が相対化されているのである³⁶⁾。

次に、ケリーの草稿は、各節ごとにクリップでとめた右肩に「完」と書かれており、完了した原稿であることが出来る。ただし、表題は第三部第二章とはされておらず、ただ単に「ケリー地代論批評」とあるだけで全体構想をまとめる以前に独立して書き上げられていた原稿であるようにも考えられる。

そこにおいてはケリーがリカード批判の徹底性においてジョーンズ以上であることが述べられた後、これまでの学説研究ではケリーの思想の背景を考慮することが不十分であるとして、第一節の「ケリーの生涯と時代」へ入ってゆく。つまり、ケリーの思想に当時のアメリカの経済事情と思想が強く影響しているものとする東浦は、見られるように経済発展の特徴をかなり詳細に論じ、また経済思想界の特徴も簡潔であるが詳しく紹介している。そして、リカード地代論がイギリスにおいて当初果たした機能が後には逆に社会主義思想に理論的根拠を与えることになったところにケリーのリカード批判の意図を求めている。

続く第二節「ケリーの地代論」では、ケリーのリカード批判の第一がアメリカにおける開拓の歴史が優等地から劣等地へではなく、その逆であったという耕作序列の問題にあったこと、第二に差額地代を全面的に否定した地代＝利子論だったことを紹介する。その上で、第三節ではケリーの劣等地から耕作は始まるという議論が一応考慮される価値あるものではあるが、リカードへの批判としては的はずれであること、第二の地代＝利子論は、リカード地代論の核心である土地の豊度の差が全く「自然的」なものではなくて、人工的な資本投資の差であるとした意味でリカード地代論の問題の一面を鋭く付いたものではあるが、それもやはりアメリカ的现实においてはリアリティを持ち得ても全面的に普遍化し得るものではないことを明らかにする。

しかし、東浦はこのリカード批判としてのケリーの限界を見定めた上で、なおケリーの地代理論はアメリカ経済の躍進的發展に対応した動態理論としての性格があり、しかもそれはリービヒによってさらなる発展を見ることが出来るものである点に、注意を喚起する。つまり、それはリカード批判として決して完全なものではなかったが、リカード地代論の静態理論としての性格を鮮明にしたという点に意義を認めることが出来るとするのである。こうして、ここにおいてもリカード地代論が相対化され、静態と動態という現実的地代現象の解明のために深められるべき方法論的課題が示されているのである。

5. 東浦庄治草稿^①³⁷⁾

第三部 リカード以後の地代論

第一章 リチャード・ジョーンズの小農地代論

第一節 序説

「リカード体系に対する初期の批評家の中で最も体系的であり且つ完全であったものはリチャード・ジョーンズ(1790-1855)であった」とキャナンは言っているが、ジョーンズの経済理論は一般にはあまり注意されていない。例へば経済学説、経済思想に関する史書の一般的なものとして有名なヘネーの著書、ジード及びリストの労作、ボナーの著書等に見ても、ジョーン

ズに就いては殆ど全く論ぜられていない。更に之れを地代学説史に就いてみても例えば□□□□の如きは殆どジョーンズに触れていない。ジョーンズの理論が重要な取扱を受けるに至ったのはマルクスがその学説史に於てこれを紹介して以後のことであるといふも過言ではない。而してそのマルクスは彼の学説史第三卷第一□章の中^(マ)第章を完全にジョーンズの研究に捧げている。其後ジョーンズの地代論に対してはディール、オッペンハイマー等が若干の示唆を与えている。

マルクスは左様にジョーンズの理論を重要なものとして説いているが、猶ジョーンズの地代理論に就いて述べる所は不十分である。然らばマルクスはジョーンズの如何なる点に重点を置いて論じたかといへば、それはジョーンズに歴史学派の見解が多分にあったという点に存する。イングラムもジョーンズに歴史学派の見解の存したことを認めては居るが、ジョーンズに於ける歴史学派の見解というのは経済組織従ってまたそれに於ける理論の歴史性を高調する所の見解であって、リカードを以てその最高峰に到達した個人主義の理論経済学と対照的立場に立つものである。マルクスはかういつている。「サー・ゼームス・スチュアート以来の凡てのイギリスの経済学者が生産方法の歴史的差別に対する理解を欠いてきたのに反し、ジョーンズの此の最初の地代に関する著述は述に此の点に於て従来のものに比し著しく特徴を現はしているのである」と。ジョーンズの経済学一般が持つ所の学説史上に於ける重要性はマルクスの前記の研究に充分詳しい。従って我々の研究は只その地代理論に関するより正細なる方面に向けられなければならない。

一、地代の歴史性

リカードの経済学研究方法はあまりに演繹的、抽象的に失するといふ点で時に非難の対象となる。然しリカード当人は決して具体的な現象の把握に無関心な人ではなく、むしろ当面現実の経済現象の研究に力を用いた人である。リカード自身の経歴から見ても、又その著述の方面から見ても、彼が常に「時」の問題に密接に結び付いて居たことは明かである。即ち彼はロンドンの一株式仲買業者の三男に生まれ、自らも亦株式仲買業に従事し年齢漸く三十歳の頃には既に生活を保証するに足る財をなしていたといふことであるし、又、彼が最初に公にした“High Price of Bullion” (1810) なる論文は明かに時事問題に刺激されて書かれたものである。更に彼の「原論」に^(マ)先づ“Influence of Price of Corn on the Profits of Stock” なる論文は勿論当時宣伝された穀物関税問題に関連して書かれている。

然しリカードが時事問題に無関心でなかったといふことと、彼の眼界が狭かったといふこととは自ら別個の問題である。リカードは良く当時の英国の経済問題に注目し、その明晰なる演繹的頭脳を以て快刀乱麻的に之れを論研した。然しその為には一面その問題の中に自ら引き込まれ、更に之れを大処、高所より三省するの機会を欠いた。そこにいはばリカード理論の欠陥が存するのであって、此の点を始めて攻撃の対象としたのが我がジョーンズであったのである。ジョーンズは言ふ。

「リカード氏は才能豊かな人である。彼は純粹に仮説的なる諸の真理を甚だ器用に結合して一の体系を組み立てた。然し乍ら現実のままの世界を一度包括的に眺むる時、我々は彼の体系が人類の過去及び現在の状態とは全然矛盾せるものなるを充分に証明し得るであろう。又曰く、

「過去及び現在は諸の経済的真理を体系づけるための豊富なる材料を我々に提供することに

力を併せてくれる。若し我々が之れ等の材料を徹底的に観察し、謙遜と細心とを以て推理を行ふも猶経済学の凡ての部門に於て健全なる智識を得難しとするならばそれは智的怠惰を示すに過ぎぬであらう」。

これ等の言葉は言うまでもなく、過去に於てリカードの樹立せるが如き理論の支配せざる社会が存在し、現在に於ても亦その存することを示すものであって、リカードがこれ等現実なる社会に支配する理論を詳しく研究せざりし点に対する批難である。

そこで地代の問題其物に帰って考へる。ジョーンズはリカード以後の学者が地代を以て剰余利潤であると観念したことを見出した。このことは凡そ次のことを前提にしている。即ち地代が剰余利潤と観念される限り、通常利潤なるものが存立しなければならない。而して通常利潤、即ち土地以外の資本の使用に対して平均利潤が獲得さる、といふ社会は一の資本支配の社会であり、此の社会に於ける土地所有は只社会に資本家的生産方法が支配するといふ関係を前提としている。即ちジョーンズはリカード流の差額地代理論は只資本家的生産方法の行はるる社会に於いてのみ可能であるといふ点に着目したのである。此の点から彼のリカードに対する反対と、彼自身の理論の展開とが始まる。

「ある人々（リカード一派を指す一東浦）の想像せる如く土地は常に最初は耕作に骨折ることをいとわぬ人々に依りて所有さるゝものだと言ふことが真理であるならば、又人類の歴史に於いて一国の未墾地がその全住民の勤労若しくは必要に対して解放されていることが通常の実事であったとするならば、然らば農業国民の進歩過程中全然地代の発生しなかつたある時代が存するかも知れぬ。且つ又地代が発生したとしても猶その国土のある部分が未占有のままに残されているとすれば、既耕地に支払はる地代はその既耕地が未占有地に対して有する位置及び地質の優越度に比例するであろう。かかる事態は在り得る。其は抽象的可能である。然し乍ら世界の過去の歴史及び現在の状態は、それが現在及過去を通じ、事実上の真理でないこと、及びかかる過程は政治哲学の体系の基礎として単なる誤解に過ぎないといふ無数の実証を提供している」。

茲にジョーンズが提示せんとする問題は、土地所有の史的発展に関するリカードの考へ方の誤解である。即ちリカードがその理論の説明に当たって土地の占有が次々に優等地から劣等地に及び、又その占有は耕作限界の拡大に応じて拡大すると説いた点に関係している。リカードがかく土地の占有が優等地から次第に劣等地に及ぶと説いたことに対して、鋭い反対を試みているのは我々の見る所ではケリーとジョーンズの二人である。ケリーはリカードの言ふ如く土地の耕作は先づ優等地に開始され次第に劣等地に及ぶものではなくして、逆に比較的劣等なる土地に耕作が始まり、人智の進歩、資本の蓄積等の進むに従って開墾困難なる優等地への耕作が展開すると説いた。然し乍らケリーの此の主張は只耕作がリカードの考へたのと全く反対の方面を取るといふ点でリカードに反対するのみであって、土地の占有前は所有が耕作の展開と共に進むといふ考へ方に於ては全くリカードと其の機を一にするのである。

然るにジョーンズの立場はケリーのそれと全然異なる。ジョーンズにあっては土地がリカードの説く如く優等地から先づ耕作されるか、或はケリーの如く劣等地から耕作されるか、という事はあまり重大なる問題ではなかつたのである。彼に於ける第一義的問題は、耕作が如何なる土地に始まり、如何なる土地に進展するののかといふ点ではなしに、土地の所有は果してその耕作が進んで進むものであるか否か、又土地には常に未耕未占有のものがあるとする

る見解が正しいか何うかといふ問題であった。而して此の問題に対する彼の答弁は、歴史的過程の示す限りでは土地はその耕作の始まる前に既にその支配者を持つといふにあった。

「人類が農業的社会 (Agricultural Community) の形態に於て結合し始むるや否や常に、最初にその取る様に見ゆる政治的観念はその居住する国土に対する排他的権利に関する観念である。その環境、その偏見、その正義或は利得に対する観念は彼等を駆って殆んど普遍的に右の権利をその共同の政府に帰属せしめ、又個人に対しては此の排他的権利をば政府から派生して個人にそれが帰属者たらしむる。」

土地所有の史的発展に関する此のジョーンズの見解に多分の誤りを蔵していることは、所有の記録に関する若干の留意をなせる者の等しく認むる所である。然し、ジョーンズが全力を持って指摘せんとした事実、即ち土地は耕作の進むにつれて占有さるるものではなく、凡ゆる農業社会を通じて土地所有はその耕作の開始に先つものであるといふ事実は多分の真理を含むものと見なければならぬ。而してジョーンズは自説を裏書せんが為にアジアに於ても、ヨーロッパに於ても土地所有がその耕作に先達って行はれていることを示し、又、封建社会に於て封建貴族が如何にリカードの所論と異った土地所有形態を示したかを説いている。而して此の所有形態の諸変化は地代に諸の形態を賦与するといふのがジョーンズの主張である。

然らば所有形態の変化が地代現象に及ぼす所の変化は如何。ジョーンズに依れば人類が農耕を営む社会を形成する程度に進展し来れば土地は全く支配階級の独占するところとなる。かく土地の独占が開始さるゝや否や、その社会に何等土地を所有せざる多数の階級の存立することは明かである。現代社会の組織から言へば生産手段は資本及土地であり、土地を所有せざることは何等土地所有者の支配下に立つことの必然を示すものではない。然し乍ら、「人民の多数の資本が少なく、農業以外の如何なる職業に依っても彼等の生活を確保するに全く不十分である」が如き初期の社会に於ては土地を所有せざる多数の大衆は只その生活を維持するが為のみに、土地所有者に対し地代を貢賦しなければならぬ。だから「かかる人々の住する国土が所有し尽くされているとすれば耕作者にとってその生活資材を獲得すべき一部の土地の占有を許容すべき唯一の機会が彼がその所有者に対して何等かの貢賦をなし得るとふことである」。即ち「人類の社会の実際の進歩過程に於ては、地代は通常土地の占有に起源する」のであって、土地の有する豊度の差異に依るものではない。

かくてジョーンズに依れば地代の性質はその史的発展の過程に於てそれぞれ異なるものである。地代はその発生の歴史に遡れば実に土地所有其事に依つてのみ説明され得る性質を有するものである。リカードの説くが如き地代は僅かに資本家階級が形成され、農業が之等資本家階級に依つて経営さるゝに至つて始めて可能なものであって、リカードがこれのみを地代としたのは不当である。過去及び現在の社会に於ては猶リカードの理論を以て説かれぬ幾多の地代現象が存することをジョーンズは指示せんとしたのである。

二、地代の種類

右記の如くジョーンズに於ては地代現象は一の歴史的所産であつて土地制度の異なると共に、或は社会の生産組織の異なると共に異なるものである。然らば彼は如何なる地代現象を考へたか。一は小農地代 Peasant Rent, 二は Farmer's Rents である。

Peasant Rent といふものは地代発達⁽¹⁾の歴史から言へば Farmer's Rent に先行するものであり従つて地代の原始的形態を取るものであるからジョーンズに於てはそれが又 Primary Rent

と名付けられ、これに対して Farmer's Rents は Secondary Rent と呼ばれている。

[空白]

地代の起源に就いてジョーンズは言ふ。

[空白]

ジョーンズは第2章に於て此のベザントレントを四分して、

1. Labour Rents
2. Melayer Rents
3. Ryot Rents
4. Cottier Rents

となっている。我々は今此等の四個の小農地代に就いてジョーンズの所論を紹介しなければならぬ。

労働地代

労働地代といふのは、農夫が一定の土地を耕作する代償として土地所有者に現実の一定の労働給付をなす場合を言ふ。而してそれはジョーンズに依ればロシアに於て、ハンガリーに於て、ポーランドに於て、等等に於てそれぞれの社会経済状態に依る特殊の形態を以て行はれているものである。

労働地代は凡ゆる小農地代の中、小農地代の最も典型的な性質をもつものである。これは農夫が自己の必要労働以上に労働を給付することが可能であることを最も明瞭に指示する所の形態である。そして此の形態に於ては、地代がリカードのいふ如く土地の優劣や、距離の遠近等を標準としてなされるものではなくて、只農民が一定の面積の土地に於て自ら食すべきものを作出して、猶過剰の労働を有し得るといふ経済状態の内に於て常に出現の可能性を持つものである。而して勿論かかる場合地代の大きさは労働者が何程の過剰労働をなし得るかに依って決定される。だからジョーンズは、「労働、農奴地代の価値、即ち土地所有者が農奴にアロットした土地から取得し得る利益は課せられたる労働の量に、一部は土地投下せらるゝ労働のスキルに依存する」といっている。即ち労働地代の場合に於ては労働の生産物が直接分割されるのではなくて、労働其物が直接に地主と農奴との間に分割されるのである。従って此の場合に於ける地代の大いさは、労働者から如何に労働を搾取し得るかどうかといふ状態に依って決定されるのである。だから土地所有者は、地代を二つの方法に依って増加することが出来る。一つは搾取労働量を増加すること、他は労働者の労働を一層有効に用ふることである。

然しこれ等の内一の方法は畢竟は何等は成果を齎らすものではない。といふわけはより多く労働を搾取すれば、第一にその労働は非能率的となる。第二に労働者自身の仕事が出来なくなる。

[空白]

以上四つの場合を詳細に論じ来りジョーンズは第四章に於て小農地代の諸特質を掲げている。而して彼が第一に其処に展開し来つた特質は小農地代が労働賃金と「不断に極めて密接に結合」していることである。曰く

「此の点に関しては、serf, Melayer, Ryot, cottier 其同断である。彼等が耕作する地点を獲得すべき条件が、彼等自身の努力に依って獲得すべき報酬を決定する上に積極的な、他に優

った影響を及ぼす。換言すれば眞の労賃」

だからジョーンズに依れば農民の労働賃金を決定するものが、従って又彼等の生活度を決定するものが何であるか、ということはその時、所に於ける各種の事情を詳細に研究してから決定されなければならぬ。かくてジョーンズは断言する。

「それ故、地球上に於ける人口の大部分が従来然かありし如く、彼等自身の食物を自らの手に依りその■から取ることを余儀なくされているといふことをつづけなければならぬ間、小農小作の形式と条件、並びにその下に支払はるる地代の性質と高さが必然的に、労働者階級の状態並びに彼等の労働賃金に指導的影響を与えることであろう」

[空白]

以上ジョーンズの小農地代理論を論考し来って我々は第一にジョーンズが著しくその見解の構成に當ってチュルゴーの影響を蒙っていることを感得せざるを得ない。そしてチュルゴーの理論の地代理論発達史上に於ける重要性を今更の如く感得せざるを得ない。此処で我々は曾て極めて簡単に触れて置いたチュルゴーの問題に触れて置かねばならぬ。此の小農地代の理論は之を更に学説発展の歴史から観察するとジョン・スチュアート・ミルに重大な関係を持っているからである。

チュルゴーは、「考察」の第十九節から二十八節に至る各節に於て地主が自ら其の土地を耕さずして他人に耕作せしめる種々の方法を挙げて、その歴史的推移の状態を示している。勿論その史的推移に関する所論は極めて素朴なものであるが、然し農業に於ける地代の発生が必ずしも常にリカード等に依って想像せられたるが如き形式に於てなされたものでないことを明らかにしている。小作制度が一の歴史的産物であることを我々はジョーンズが恐らくチュルゴーから暗示せられたであろうと考へて差支へあるまいと思ふ。といふわけは、後にも示すが如く、ジョーンズ所論が単にチュルゴーのそれと類似しているのみならず、ジョーンズ自身がチュルゴーの言葉を著書の所々に引用しているからである。

次にジョーンズとチュルゴーとの著しき一致はジョーンズの所謂企業農地代の問題についての二者の見解の一致である。チュルゴーは前記の諸章に於て各種の小作制度を論じたる後曰く(第二十七節)

「農耕の為土地を貸付くる方法は地主農夫の両者に対して最も有益なるものである。富裕なる農夫が耕作に要する前払ひをなし得る地位にある所にあつては何所に於ても此の制度を行ふことが出来る」。「最初の方法は総ての中で最も利益の大なるものである」と。

かくてチュルゴーは時勢の進展につれて小作制度が次第に変転し行くことを明らかにしているのである。ジョーンズが最後に小作制度が最も有効なる故それに■■と見た見解は恐らくはここから来ているのであろう。

更に地代発生の原因に関するジョーンズとチュルゴーとの見解には全く相似たるものがある。チュルゴーは農業労働の生産力が自己の生産費以上を生産し得るに及んで始めて地代成立の可能なることを意識的に論究した。それは我々が屢明かに示して置いた所である。然るにジョーンズも亦その論著の初めに於てかういふことを言っている。「The power of the earth to yield, even to the rudest labours of mankind, more than is necessary for the subsistence of the cultivator himself, enables him to pay such a tribute, hence the origin of Rents」これは又スミスに於ても説かれていた思想であるが、スミスの如くに企業地代論をなさずに、小

農地代論の立場で行くときはこれは相当なる正しさを持つものである。而してジョーンズは恐らく此の思想を「考察」第一節のチュルゴアの文句から暗示されているのであろう。

更に労働賃銀と地代の高さの關係に就いてチュルゴアとジョーンズの見解は相近い様相を呈している。チュルゴアの曰く「併と彼は多少それ（労働）を高価に売ることが出来る。然しその價格に多少高低があるとしても単に自分自身の考へには行かない。その労働に対し賃金を支払ふ所の人の約束の結果に依るのである」。これは自由労働者、農業労働者を通じての事実である。これはジョーンズが小農地代の特質として擧げていた所と全然又一致する。即ち労働者の賃銀は地代の高さによって決定されると。それは裏からいへば労働賃金契約に依存することを示すものである。かくて我々はジョーンズの地代理論が極めてチュルゴアのそれと密接に結合していることを察し得るのである。このことは次の如き引用句からも実証され得る。即ち彼は第三章第六節に於て数度チュルゴアを援用しているのである。

[空白]

以上に依って我々はジョーンズとチュルゴアとの密接なる關係を知り得た。そして此のジョーンズが又マルクスの歴史觀に対して密接なる關係を持っていることを知り得るのであるが、特にマルクスの絶對地代の理論に対してこれが少なからぬ示唆を与えていることを否定するわけには行かないと思ふ。何となれば、「土地が耕作される以前に先づ占有された」といふ歴史的事実は絶對地代論に於ける第一の条件であり、そのことは學說史的に見てジョーンズに於て始めて高調された所だからである。然し土地所有に關するこの歴史的事實の認識者が、既にチュルゴアであることは我々が説いた所である。マルクスがチュルゴアを考ふることに割合に詳しくあり乍ら、此の點に於けるチュルゴアの先驅と認めなかつたことは彼の重農學派に対する偏見が彼の眼をくらましたものかとも考ふる。

ジョーンズ出でし以後、兎に角彼の地代論が學問上の問題となつたことは確かである。然し我々は彼の地代論を認めたものをマルクスに止めてはならない。彼の理論は實に又ジョン・スチュアート・ミルを通じて英國の學界に長い尾を引いているからである。このことはイングラムが既に述べている所である。さてミルが如何にジョーンズの影響を蒙つたかといふことは彼がその分配論に於て先づ、土地、労働、資本の所有者が三つに分離していない多くの場合の存することを示している點

[空白]

ジョーンズに対する批評

ジョーンズの地代論に対してはマルクスが比較的詳しい批評を試みている。

既に述べた様に地代の歴史性に就いての認識に關するマルクスのジョーンズ批評は正しいが、その點でマルクスがチュルゴアを■■しなかつたことはマルクスの失敗である。

地代に關する所述の考古學的、或は史學の見解が正しくないことも亦マルクスの認むる所である。

[空白]

ジョーンズに対する批評は大體に於て三つの部分からなされなければならない。第一は社會の進歩に關するジョーンズの見解が正しいか何うかといふこと、第二はリカード地代論に対するジョーンズの批評が正しいか何うかといふこと、第三はジョーンズ自身の見解が正しいか何うかといふこと。

6. 東浦庄治草稿②

ケリーの地代論批評

序説

リカードの地代理論に対する反対者は修正をなしたものは甚だ多いが、それ等も多くは根本的な点に於て充分リカードを否定して居るものではない。例へばリチャード・ジョーンズの如き既に早くリカードの理論の非普遍性を高調して居るけれども、それとて決して資本主義経済社会内部に於けるリカード地代論の妥当性を否定したものではない。否、ジョーンズは大農の場合に於てはむしろリカードの理論が正しいことを認めて居るのである。彼は只当時（ジョーンズの時代）彼の小農地代 Peasant Rents の支配する社会がより多きことを主張したに過ぎない。又ロートベルトスーマルクス流の地代理論はその学的系統に於てリカードと全く相反する立場に立つけれども、地代理論、特に差額地代理論に於ては全然リカードを踏襲するものである。

然し学説史的に見て殆ど否定されたことなきが如く見ゆるリカードのこの理論に対しても、徹底的なる反対論をなしたものが全くないわけではない。而して今吾々が論ぜんとするケリーはその小数なるリカード反対論者中の著大なる、而して初期の論者の一人である。それ故にケリーが地代学説史上に持つ所の地位は極めて重要でもあれば又特異なるものでもある。従ってケリーに対しては従来幾多の論評が試みられて居るが、中でも重要なるものはウォーカー Walker*、ベーレンス Berens** 及びターナー Turner*** の三者であろう。而してウォーカーは全く反対の立場からケリーを極端に攻撃して居り、ベーレンスはその思想の背景を考慮することなく、ターナーは要領良くその批評を試みて居るが、惜しむらくは稍粗に失する。故に吾々は此れ等先人の所論を参照しつつ、ケリーの批評に更に一步を進めたいと思ふ。

* Walker, Hand and its rent, (1883)

** Berens, Versuch einer Kritischen Dogmengeschichte der Grundrente, (1868). Dorpat.

***Turner, The Ricardian rent theory in early American Economies, (1921). New York.

第一節 ケリーの生涯と時代

ケリー Henry Charles Carey の父は有名なるマッチュー・ケリー Matew Carey であるが、彼はアイルランドからの逃亡者で、後年はフィラデルフィヤに於て出版業者として成功したものである。その建設にかゝる大印刷場は今日でも Hea Broctiers & Co. と呼ばれて残存して居ると言ふことである。彼がアイルランドからの逃亡者で、イギリスに対して少なからぬ反感を持っていたと言ふことが、子ケリーの反英思想に重大なる関係を持つと称するものもあるが、それはターナーも言ふ様に余りに穿ちすぎた考へ方であろう*。父ケリーはかく一方に於て有能なる実業家であったと共に、又有名なる政治家であり、著名なる論述家でもあった。従ってその著作も多く、実際方面に於ては当時アメリカの保護貿易運動の急先鋒をなした所のペンシルバニア・ソサイティの会長として大いに活動して居た。かの独乙の保護貿易論者リストの如き、父ケリーの影響を、その米国遊歴中に、多分に受けて居ることは周知の事実と言っても良い。

*例へば Elder Wm., Memoir of H.C.Carey 参照。—Turner より。

小ケリーは此の父の子として一七九三年フィラデルフィヤに生れ、父業を継いで出版業者となったが、既に一八三五年にはその業を廃め、爾来一八七九年同じくフィラデルフィヤに没するまでの長き生涯を経済問題の研究、■論の指導に没頭したのである。この間彼に依ってなされたる論著は著しい数に達するが、その中わけても我々に関係深く、且つ重要なるは主著“Principles of Political Economy”及び“The Rent, The Present and the Future”の姉妹編であろう。しかして前者は一八三七-四〇年に、後者は約十年後一八四八年に公刊されたものである。然しウォーカーも言ふ様に* 此の二著の所論に於ては殆ど重大なる区別の存するなく、只ケリーが愈リカード理論の誤謬を確認し、益々自説の妥当性を高調して居るに過ぎない。さればケリーの思想の背景をなす所の諸現象は一八三〇年から五〇年の交と見て差し支えないが、特にその思想的成長期たる一八二〇年代も閑却してはならない。従つてケリーの思想の背景としてはこの時代の思想界と経済界の情勢のスケッチを必要とする。而して小ケリーに対して、父ケリーの及ぼせる影響も充分これを認めなければならぬことも確かである。

*Carey, op. cit. p. 75.

先づ当時の社会経済状態を顧る。

ターナーに依れば「一八三〇年から四〇年迄に人口は三二・七%を増加し、次の十年間には三五・九%を増加した。一八六〇年に於ては四〇年に比較し富は二倍になって居る。工場、工業の発達、発明と技術の進歩は物質文明の大進展を来し、一八三〇年以後の二十年間に鉄道哩数は二九哩から九〇二哩に激増した。ケリー及びその一党の人々の住居地フィラデルフィヤは鉄道の中心であった*」が我々は今少しく此の間の事情を詳細に述べて置きたい。

*Turner, op. cit. p. 110.

ボカード* に依れば一八〇〇年代の初期に於けるアメリカは未だ純然たる農業国の域を脱せず、工業的方面の進歩は極めて微々たるものであったが、それでもその将来に於ける発展の兆候は充分に看取された。而して此のアメリカの工業に最初に最も重大なる発展の動機を与へたものはナポレオン戦争であったと言はれて居る。即ちナポレオン戦争の結果アメリカの海外諸国との取引は杜絶し、一方農産物の輸出が困難となると共に、工業生産品の欠乏が甚だしく、国内工業生産振興の必要が国民的に痛感され、又必然にその方面の活動を刺激した。然し如何に発達した所で、その速度には自ずから限度があり、今日から見れば進展の程度は猶微弱であったと言ふ外ない。だから当時内地の生産品を以て国内需要を充たし得たものは主として日常の消費財のみで、今日工業的生産として重要視される所の繊維工業、鉄工業等は未だ見るに足るべき発達を遂げなかったのである。然しかく言つたからとて此の方面の発達が全然なかったかと言へば決してさうではなく、次第に進歩の傾向の窺われたことは事実である。例へばニューイングランドに於ては繊維工業の工場は一八〇三年に僅かに四工場に過ぎなかったが、五年後の一八〇八年には十五に増加し、総錘数は八千を算するに至った。がこの錘数は加速度的に増加し、三年後の一八一一年には十倍の八万錘に、更に三年後の一八一五年には五十万錘を称ふるに至った。以てその急足の進歩を知ることが出来るであろう。

*Bogart, Economic History of The United States. (1912)

去り乍らナポレオン戦争の終了に伴ふアメリカの海外貿易関係の快復はかくの如く漸く発展の機運に向かった所の当国の工業に対し一抹の暗影を投ずるに至った。即ち一八一四年戦争中

は僅かに一千三百万弗に過ぎなかつたアメリカの輸入額は一八一六年には実に一億四千七百万弗と言ふ約十一倍の巨額に急騰したのである。当然の結果としてアメリカの工業は大打撃を受け、出鼻を挫かれることゝなつた。於是全アメリカの製造工業家は国内産業保護を目的とする保護関税の設置を要求するに至つた。然しこの工業者側の切実なる要求は、船舶業、農業等の好景気に基づく国民的有頂天の雰田気内にあつては、兎もすれば忘却され勝ちであつた。と言ふのは、海外貿易復旧のためアメリカの船舶業及一般商業は再び旺盛となり、農業は穀物輸出の再開と共に再び有利に展開したからである。当時の保護貿易論者の急先鋒たるハミルトン等が農商工の利益の相関的なることを主張した所以であらう。

然し乍ら此の如き農業者の黄金時代は何時までもつづきはしなかつた。即ち先づ一八一八年に置ける経済変動は農業と船舶業とを著しく脅かした。又農業に就いて見ると既に一八一五年イギリスに於て例の穀物条例の改正が行はれ、その為対英輸出を重点とするアメリカの穀作は次第に不利に赴いた。かくて、海外に於けるアメリカ穀物市場の不利益と、輸入工業品に依る内地工業の圧迫とは、漸次アメリカ人をして保護貿易論に傾聴せしむるに至つた。かくてアメリカの工業は漸く隆盛の機運に向かつていたのであるが猶アメリカの重要諸産業がホーム・システムからファクトリ・システムに変わる至つたのは一八三〇年以後のことに属する。で我々はこの基本的産業に就いて、更に詳しく進歩の跡を検覆して見やう。

先づ綿工業に就いて言ふと、ナポレオン戦争後アメリカの斯業が一時挫折せんとしたことは前述の通りである。当時全盛を極めたランカシヤの紡績業が、幼稚なアメリカの紡績業を圧迫した状況は今日猶想像に難くないと思ふ。だが保護貿易論者の主張が漸く入れられ、一八一六年以後保護関税が課せられるに及んで、当国の斯業は確実にその基礎を築くに至つた。殊に当時アメリカに於て綿花の栽培が隆盛となるに及び、茲に原料生産と保護関税の二要因が相呼応してその発展を期せしむるに至り、一八二四年の頃には既に確固不動の根底を張つたのである。いまこれを綿糸価格の方面から観察すると、一八一五年に於ては未だ手工業の域を脱せず、従つて高き生産費を要せる結果、一ヤード四十セントの高価を称へたのである。然るに一八二二年には既にその半額二十セントなり、一八二九年には実に一ヤード八セント半に下落して居るのである。しかして手工業が全く駆逐せられたる一八五〇年の頃には一ヤード正に七セントと言ふ低落ぶりを示して居る。そしてこの価格低落の原因如何と言ふに、これは右期間中に於ける当国綿花生産の激増に伴ふ原料綿花価格の低下に依るものかとも考へられるが、實際はむしろ機械的生産に基づく生産費の低下に由ると称し得られる。今上述せる期間の綿工業発達を示すべき数字を表示すれば左の如くである。

綿糸業累年比較表

年次	工場数	資本金額	錘 数	生綿消費量	生産価額	使用人員
単位		千ドル	千	千ポンド	千ドル	人
1805	4	—	5	11,000	—	—
1815	—	40,000	130	27,000	24,300	100,000
1831	795	40,615	1,247	77,757	26,000	62,157
1840	1,240	51,102	2,214	126,000	46,350	72,119
1850	1,074	76,033	3,634	—	65,502	94,956
1860	1,091	98,585	5,236	422,705	115,682	120,000

毛織物業累年比較表

年次	工場数	労働者数	使用原料	生産価額	資本額
単位		人	千ドル	千ドル	千ドル
1815	—	50,000	7,000	19,000	12,000
1840	1,420	21,242	45,000	20,697	15,765
1850	1,675	45,438	—	48,609	31,972
1860	1,470	50,419	—	73,454	38,814

次に羊毛業の發達の概況を示して見れば左の如くであつて、此の分野に於ても亦著しき進歩の存したことを見るのである。

これに依つて見ると工場数には殆ど変化がなきにも拘はらず、資本額、生産額には著しい増加の存したことが窺はれる。これは工場組織が次第に大規模化した結果であること疑ひない。只綿業と比較してその發達に稍緩慢の傾向あるは綿花に比較して原料生産が旺盛とならなかつたからであらう。

かくてケリーの思想の温床となつた当時のアメリカの經濟界は、一面将来に対する大なる期待を持ちつゝ、現在の産業保護が必要なる事情にあつたことを明かになし得たと思ふ。このことは曾てアメリカに遊べるリストが彼一流の保護貿易政策論を樹立するの確信を与へたと言ふ事情に対照し、少なからぬ感興を引くのである。

此の一般經濟事情と相並んで、而もケリーの地代理論構成に有力なる動機を与へたものは特に当時のアメリカの農業事情であつた。ナポレオン戦争の後アメリカに經濟的國民主義が勃興したことは既に述べた。その結果として工業が隆盛にあると共に、又農業が盛んとなつて來た。而して農業上の進歩はその機械化に依る生産能率の増進と、一方開墾に依る耕地の増加との二方面に於て表はれた。而して第一に農業の機械化には相当なる資本を要し、此の方面に於て資本に対する要求が当時農業方面に於て大きかつた。然しそれと共に機械利用による大規模開墾事業の出現は、更に農業方面に於ける資本の流入を必要とせしめたのである。而して当時のアメリカに於ては元來土地が自由財たる性質を有したからして、これの開發は只資本力に待つを以て足つたのである。だから当時アメリカの人々にとっては只資本と労働とが農業上の関心事であつたので、ケリーがその理論に於て全く土地の豊度を人の力に待つものと解した根拠は此の辺りの事情に基づくものと言ふことが出来様と思ふ。

極めて簡単ではあるが、我々は以上を以てアメリカの当時の經濟界の有様を概説し得たと思ふ。故に更に当時の經濟思想界の概要を次に考察することにする。

我々がケリーの思想を大觀するとき第一に感ずるのは其の論調が全く楽天的で、マルサスやリカードに認めらるる陰惨な気持ちを持たないことである。イングラム等もケリーの主張はマルサス流の悲觀的學說に対する反動であると言つて居る。而してケリーのこの反動的樂觀論は實に前途洋々たるアメリカの經濟事情の所産であると言つて差し支へない。然し乍らかゝる思想は決して卒然としてケリーの上に表れて來たものではなかつた。彼の父エム・ケリーが既に有名なる保護貿易論者であつたこと、又ハミルトンの保護貿易理論が既に早く世に出て居たことも人の知る所である。が要するに、米國産業の将来に大いなる希望を抱きつゝ現在の幼弱なる産業を保護せんとする楽天的理論が恐らく当時のアメリカの經濟思想界の状況であつたと思

はれる。このアメリカの経済界、思想界はケリーの理論に寄与する所大なりしは言ふにまでもない。然しケリーをして特にリカードを甚だしく攻撃せしめた理由は、更に別に社会的理由があった様にも思はれる。それは何かと言へば当時漸く台頭し来れる社会主義的思想に対するケリーの嫌悪であろう。

スミスに出発する個人主義経済理論は、リカードに於てその理論的精緻の極に達したのであるが、それと同時にリカードの経済理論はその論敵たるべき社会主義の理論に対し、精鋭なる武器を与ふことゝなった。殊に彼の労働価値説と地代理論とは、そのまま社会主義的思想家の逆用する所となったのである。だからケリーの役目は社会主義の攻撃の前に將に斃れんとする正統派の経済学を、マルサス、リカードを否定することに依って救済せんとする所にもあったのである。故に我々は更に経済学界に於けるこの間の経緯を出来得る限り簡潔に叙述して置かなければならない。

スミスの自由放任論は、人類の経済活動を自由に放任することが結局人類の福祉を招来する所以である、と言ふ思想に根拠を置く。而して資本主義発達の初期に於ては成程スミスの言ふが如く、社会の富が増加し、社会全員の福祉が齎され得る様に見えたが、資本主義が次第に発達するに従って社会の富の生産力は著大に増殖され、而して又有産階級の福祉は増大されたが、無産階級の生活は何等向上する所がなかった。この故にゴドウィン一派の初期の社会主義が出現して個人主義経済学の建物を震撼せんとしたのである。而してこの一派が当時の無産大衆困窮の罪を、地主及び資本家の搾取に負わしめたことは勿論であるが、この社会主義的思想に対して個人主義経済理論の陣容を一層固く防御する役目を演じたのがマルサスとリカードとである。マルサスはその「人口原理」に於て労働階級の貧困は何等経済社会組織に罪ではなくて、先見なき人口増殖の行はるゝ必然の結果である。即ち貧困は人類自然の不可避的現象であって、資本家の罪ではないと主張した。かくて労働階級貧窮の理論が樹立され、殊に彼の所謂賃金鉄則は資本利得の合理性を説明した。換言すれば、スミスは資本の増加が必然労働者の賃金を高揚すると見たのであるがマルサスは、一定社会に於て資本として労働者の雇用に充当するゝ分は一定している。然るに人口が不断に増加すからして、賃金は低下するのである。故に人口増加が、従って労働者自身がその罪惡と貧困の責めを取るべきであると。

然し何人が見るも、最も不勞所得の形態の濃厚なる地代は猶その説明が充分に行はれなかった*。然るにリカードは地代の概念中から先づ人為的なる部分を除外して、純粹抽象的なる部分を思考し、そしてこの地代、「差額地代」は土地の自然的性質に基づいて発生するものであって一般に言はるゝ様に地代あるが為に穀物価格が騰貴するのではなく、穀物価格騰貴するが故に地代が発生するのである。即ち地代は社会組織の結果発生するものではなく、地味の自然的差異に原因する。従って、地代は自然の産物なるが故に、その発生若は取得は善である。少なくとも悪ではない（何となれば個人主義経済学者及当時の一般思想家に取っては猶「自然」が善であったからである）。かくて労働階級の生活を困難ならしむる所の穀価騰貴は、決して地代が地主によって取得されるからではなく、むしろ穀価騰貴するが故に、地主の手に地代が「自然」の結果として流入するのであるとて、「地代」の個人主義的取得が弁護された。そしてマルサスとリカードの理論は全く当時の思想界を風靡し、熱せる社会主義的理論は三千の冷水を掛けられてしまった。

*Malthus に完全なる地代理論ありと称せらるゝも、マルサスの理論は彼の「人口原理」

の巨大さに圧せられ、地代弁護論としての「社会的役割」を充分演ずるを得なかった。けれどもかかる理論的征服は日々眼前に展開さるゝ事実を征服することは全く不可能であった。マルサスや、リカードの理論が是認さるゝとしても、「自然が善」であるとの根本的思想に動揺なきわけには行かなかった。

リカードの経済学説が労働価値説に根底を置くと云ふ事は十九世紀前半の英国社会思想家の利用する所となった。所謂リカーディアソシヤリストと称せらるる一群の思想家はリカードの理論を根拠としてその学説体系を編んだ。中でもマルクスの理論発展の母とまで言はれたる William Thompson の如き完全にリカード理論を社会主義的に応用したのである。そしてこれ等の思想家の影響は正統派経済学の陣容に及び、正統派理論の最高峰に達せるものと言はれるスチュアート・ミルに於ては社会主義思想の洗礼が著しく鮮やかである。殊に地代に就いては彼は全然社会主義的思想の分野に入り込んでいる。そして一八三〇年代から欧州諸国に近世社会主義的運動が漸く優勢ならんとした。これがケリーの学説に温床の役目を取った当時の経済思想界の概要である。そしてケリーは当時のアメリカの社会を眼前に見つゝ個人主義経済学を、その社会主義的惑溺の中から救済せんとしたのである。彼はこの目的の為に地代理論に於ては正統派の頭目リカードを攻撃することにより、間接に社会主義的理論を拒否せんとしたものであらうと思はれる。

第二節 ケリーの地代論

ケリーの地代理論がマルサス・リカードの地代理論を否定する目的を持って生まれたことは前に述べた。故にケリーの思想はリカードに対するケリーの非難を明らかにすることに依つて一層これを明瞭にすることが出来る。

ケリーは言ふ「リカードの見解に従へば土地の使用に対する代償は一定の『本原的、不可壊的』なる土地の支配の為に支払はるゝ。而して耕作は人口の増加に伴ひ、少なき労働収益しか齎らさない所の『常に豊度の遞減する』土地に移ることが必要となるときはその代償はその相対額に於て増大する。かくて人類に対する自然の権力は絶えず増大し、人間は愈自然及自己の同胞の奴隷となる」と而してリカードの理論はかかる内容を盛るものであるからして大体次の如き構成をなすのである。

一、土地耕作の初期に於ては人口未だ少なく土地の所有は豊富であるからして、最大の労働報酬を齎らす所の、最も優秀なる土地のみが耕作される。

二、人口密度の増大に従つて土地は尠少となるが故により豊沃ならざる土地が耕作さるゝこととなる。此の場合人口は第一の土地に於ては第二の土地に於けると同一の労働、資本投資を以て、より多くの収穫を得ることとなる。此処に於て第一の土地にはその自然的豊度に相当する地代が発生する。

三、その結果を別言すれば人類の進歩と共に労働の生産力は次第に減少することとなる。

四、而して労働生産力が次第に減少すると共に地代は騰貴し、地主と小作人との利害は愈々相反する結論となる。

ケリーはリカードの理論として大体右の如き諸条項を挙げたる後、リカードが此の如き理論を樹立するに至つたのは、彼がその前提に於て全く誤つて居たからだと言ふのである。然らばケリーがリカードを批評しその誤謬の根源であるとなした処の前提とは何であるかと言ふに、

それは耕作展開の順序に関するリカードの見解に外ならなかった。リカードはその理論説明の道程に於て、確かに、耕作が最良の土地から始まって、次第に劣等地に移行するものであることを述べて居る。然るにケリーの見解に依れば、これは全く人類発展の歴史を無視したものであって、人類社会に於ける耕地拡大の行程は決してリカードの言ふが如きものではないのである。

然らば耕作は如何なる順序を以て展開されて行ったか、ケリーに依ればそれはリカードとは全く逆な順序に依って進んだものである。彼が此の事実の例証として挙ぐる所はアメリカに於ける移民の開墾事情であった。彼によれば、元来豊饒なる土地と言ふものは常に自然のままに於て植物の生育に適するものである。それ故に自然のままに放任せられたる土地として見れば、豊饒地なればなる程動植物の繁栄に便であり、従って人類に対しこれが征服を困難ならしむるものである。従って最初に開墾に従うものはかくの如き困難なる土地の開墾を許されず止むを得ず比較的劣等なる、従って開墾と労働を要すること少なき所より耕作を開始するのである。而して人口が増加し、人智の進歩するに従って、機械の利用、共働の労働に依り、始めて豊饒なる地方の開墾耕作が行はれるのである。此のことは単に机上の理論たるのみならず、実にアメリカ移民の實際が明かに示して居る所である。故にケリーは曰く「リカードが若し常に貧困なるが如き最初の移民の行動を考究すべき機会を有したならば、若しくは彼が少しでもその研究に於て、豊饒なる土地は常に溪谷地にあり従ってそれが開墾され、排水され、人間の使用に適する如く整理さるゝまでには多大の労働を要すると言ふ事情に就いて考察したならば、彼は決してその体系（リカードの体系—東浦）を立てることはなかつたであろう、と。即ちリカードの理論とケリーの理論とでは此の点に於て全く相反するわけであるが、その正否に就いては後節に於て論ずる。

リカードに対するケリーの第二の批難は、無論此の第一の前提からの派生的批難であるが、リカードの理論に従ふ必然の結果として農業に投ぜらるる労働の生産力は社会の進歩と共に減少すると言ふ批難である。実はリカードの理論に於ては労働生産力増加の問題は本来問題とされて居ないのである。然るにケリーが此の点を特に論ずるのはそれが彼自身の地代理論と重要な関係を持つからである。今此処にケリー自身の地代理論の本質を言へば、それは差額地代否定論、換言すれば地代＝利子理論である。地代とは資本に対する報酬と労働賃金とに外ならぬとの理論である。彼とても自然に存する豊度の差異は之を認めたのであるからして、此の豊度の差異に基づく剰余取得を、資本と労働とに帰属せしめなければならなかつた。而して彼に依れば前述の如く土地の耕作は次第に優良地に向かって進展するものであるからして、土地の収穫は次第に増加する。故に此の増加分は労働生産力の増加分として理論づけられなければならなかつた。これ彼が社会進歩に伴ふ労働生産力の増加を高調した所以である。

扱て我々は最後に、ケリー地代論の核心的問題に触れなければならない。そして此の問題こそはケリーをして地代学説史上著大なる地位を持たしむる所の点である。而して此の問題は前に屢述した所の、差額地代否定論である。

リカードは地代—差額地代—を土地の自然的、不可壊的なる生産力の差異に基くものと考へた。勿論リカードの考へ方に厳密に言へば随分不十分な点が認められないではないが、彼の理論の骨子はそこにあつた。然るにケリーは此のリカードの緒論に反対して、所謂地代なるものは決して土地の自然的、不可壊的の性質に基くものではないと主張したのである。此れは従来の

伝統的理論に対する著大なる反抗であった。然しケリー自身既に土地其物に対する豊度の差異を否定することは出来なかつた。此の豊度の問題に就いてはリービッヒが更にケリーよりも自然科学的に説明を試みて居る。彼の説明に依ってリカードの言ふが如き「自然的、不可壊的」性質なるものが、一部は極めて素朴な非科学的概念であることが説明された。然し又厳密なる自然科学的概念を持ってしても、各種の土地に自然的生産力の差異あることも否定することが出来ぬと言ふ結論は得られた。

ケリーの所論は勿論かくの如き詳細なる分析的研究を伴ふものではない。彼は極めて素朴にリカードと全く同様に、土地の不可壊的性質に基づくその生産力に著しき差異あることを認めただのである。然し此の前提を認むることはやがてリカードの差額地代論を認むることとなるわけである。此処にケリーとリカードの分岐点がある。ケリーはリカードと共に土地の豊度の差異を認めつゝリカードを否定せんが為に、豊饒地の開墾の困難と言ふ問題を提出したのである。豊饒地は植物の繁茂繁く、水分多く、それが利用には非常なる労力を要するのである。故に豊饒地の豊度に基づく増収は要するにこれに多くを要する労働力の報酬でると言ふのである。彼はこの事実を示さんが為にアメリカ移民の實際を指示して居るのである。

第三節 批評

以上を持って我々はケリーの地代理論と、その経済的並びに思想的背景を略説した。で最後に残されたる、而して最も重要な仕事は、之の理論と背景とを接合しつつ、ケリー地代論を正しく批評することである。

私見を以てすれば、リカードの地代理論に対するケリーの批評が正しいか何うかと言ふ問題と、ケリー自身の地代理論が妥当性を有するか何うかと言ふ問題とは全然別個のものであると思ふ。而して此の点の説明は後段所論の進むに従つて明かにされることではあるが、只問題取扱の便宜上、此等二つの点を相交渉せしめて考察の歩を進むることとする。

既に述べた如くリカードに対するケリーの反対の第一のもの、而してケリー自身に於て最も根本的なりと考へられたものは、耕地の展開順序に関するものである。即ちリカードは耕地が最も豊饒なる土地に始まり、人口の増加に伴う食物需要の高騰に応じ、次第に劣等地に向ふと言ふのであるが、ケリーは之れに対して、耕作は最初先づ比較的劣等なる土地に始まり、次第に優等なる土地に向かつて展開されると言ふのである。ベーレンスの如きは此の問題を極めて簡単に片付けて居るのであるが、我々の見る所を以てすれば、ケリーの理論の重要な部分をなし、此の問題の考察がやがてケリーの理論の基調に触るゝことゝなると思ふが故に、研究は先づ此の点から出発しなければならぬと思ふ。

リカードの理論に於て述べられて居るが如き耕作順序の展開が、実際の歴史的事情に一致するものであるか、或はケリーの言ふが如き順序が事実に近いものであるかと言ふ、農業史の問題は一概に一般的断定を下すことが出来ぬと思ふ。ケリーが言ふ様に、豊饒なる土地は常に又自然的植物の發育にも好適なる土地であるから、これ等の土地を開墾するには多くの労力と資本とを要する訳である。従つて徒手空拳の一労働者はそれが如何に豊饒なる土地であっても、これを経済的に利用することが出来ぬ。従つて比較的劣等な、手頃の土地から先づ耕作を始めるであろうと言ふことは一応考慮さるべき価値あることであり、現にアメリカの農地開拓に於てその存したことは事実の示す所である。だがアメリカに於てそれが事実であつたからとて、

決して之を普遍的なる現象と言ふことは出来ぬと思ふ。極めて幼稚な、素朴の見解から言つて見ても人類の文化の発祥が、揚子江やナイルの河畔に存したと言ふ事實は、農耕のことが最も豊饒でない土地から始まったと言ひ得ない事實を示すわけである。又旧文明国に於ける現在の農業状態を観察するならば、ケリーの所説の如き現象が決して現はれて居ないことは直ちに認め得らるゝ所であると思ふ。

単に現実の歴史に於てケリーの言ふが如き現象が行れざりし所であるのみならず、理論的に見てケリーの立論は些か矛盾する所がある様にも思はれる。第一にケリーが耕作は劣等地から始まると言ふけれども、その劣等地なるものは自から一定の限度がある。即ちある一人の農夫が土地の開墾を行ふとすれば、少なくともその土地が彼及び彼の家族を支持するに足る所の作物を齎す程度の豊度を有する土地でなければならぬことは言ふまでもない。而してその劣等地なるものゝ限界がケリーに於ては不明である。第二に耕作が次第に優等に向かつて進展するものとすれば、土地が無限の広延を有せざる限りは、終にその優良地の極限に到達せなければならぬ。これは理論的過程の必然である。かかる場合に至つて更に人口増加し、農産物需要が増すときは、土地に収穫逡減の法則が支配する限りは、耕地は再び劣等地に向かつて進展しなければならぬこと、丁度リカード理論に於けるが如くであらう。然らば此の点に於てケリーの耕作順序に関する所論は論理的、又實際的限度を有するわけである。而してかゝる限度のあることは、勿論直ちにケリーの理論の欠点とはならないけれども、彼自身がその理論の妥当性の限度を自覚しなかつたこと、否むしろそれを普遍的理論であるが如く考へたことは、越権の■ ■と言はねばなるまい。殊に英国の如き既に最高の耕地が耕作され終つたと思はるゝ旧文明国に於てリカードの立てたる理論を全く別な立場から批評するのは間違つて居ると思ふ。が兎もあれケリーの所説が又全然誤謬と称し得ざることも明かではある。

然し乍ら此の耕作展開の順序に関するケリーの見解が正しいかろうと、何うあろうとも、而して又リカードの所説が如何であらうとも、リカードの地代理論を批評するに当たつてケリーがこの点に重点を置いて居るのは、リカードの批評其物としては取らざる所である。何となればケリーの地代理論にとってこそ耕作順序の問題は重要なものであらうが、リカードの地代理論に取つてはこれは実はケリーが考へる程重大な問題ではないのである。従つてケリーが言ふ様にたとへりカードのこの点に関する所説が間違つて居るとしても、その為にリカードの地代理論の根底が崩壊するものではないからである。思ふにリカードが耕作進展の順序に関して述べて居ることは、ウォーカーも言ふ様に一つの説明の手段にすぎないのではあるまいか。さればこそリカードはこの問題を極めて単純に取り扱ひ、何等の予備的説明なく卒然として耕作の劣等地から始まることを説いて居るのである。即ちこれは一個の説明手段としての仮定であると見るのがむしろ穏当な解釈であらう。リカードの地代理論構成の態様から言へば、耕作が優等地から始まったか劣等地から始まったかと言うことは別に何等の問題ではなく、只現実の問題として、現に耕作されて居る農地に優劣の差が存すればそれで彼の理論の前提は足りるわけである。即ち当該社会の要求によって、最も優等なる土地のみならず更に劣等なる土地が耕作されて居るとの事実が存在すればそれでリカードの差額地代理論の成立には差支へないのである。何となればリカードの地代論は、等量の資本と労働とが投ぜらるゝに拘らず、土地の自然的性質によってその収穫に差異が生ずる。この収穫上の差異が即ち地代であると言ふのであるから、それ等の土地の何れが先づ耕作され始めたかと言ふことは問題でないわけである（此

の場合、位置の差異の問題等は略して置く)。それだからこの耕作順序に関する問題がリカード地代論の重心をなし、リカード理論はこの出発点に於て誤謬なるが故に凡て誤謬であると言ふケリーの論評は確かにその的を失して居る。殊に耕作順序其物に就いてもリカードの所説に幾分の真理が認めらるゝに於て、ケリーの誤りは二重である。

リカードの地代理論にとって耕作順序の問題が重要でないからとて、然しそれがケリーの理論にとって重要でないと言ふわけには行かない。ケリー自身がこの問題を非常に重要視して居る点から見ても首肯さるゝ如く、これは彼自身の理論に取っては重大なる役割を演じて居るのである。既に述べたる如くケリーの立場は所謂地代理論の否定なのである。彼に依れば地代とは要するに土地に投ぜられた資本、労働に対する報酬であつて、一般の利潤と何等差異なきものであると言ふのである。然しケリー自身も土地に存する豊度の差を否定するわけには行かないからして、この自然的性質を人工的性質に改変しなければならない。此処に彼の行論の苦心の存する所があるのである。而して彼はこの豊度の差異を開墾の困難という事実に関連せしめ、遂にその為に要する資本の巨額という点に持つて行つた。かくて資本少なき時代に於ては比較的劣等なる土地の耕作が行はれ、資本の増加するに従つて開墾困難なる土地の耕作が行はれる。かくの如くにして始めてケリーの地代否定論が是認され得るのである。それで我々が、この点に就いて得る所の結論は、ケリーの耕作順序に関する所説は一八三〇年代のアメリカの如き雄大なる未墾地を有する社会に於てのみ可能なる事実であり、若し彼の地代に関する理論が正しいとすれば、それは只当時のアメリカに於てのみ妥当なる理論であつたと言ふの外はないと思ふ。

次の、そしてケリーの地代論の特質を示すべき好個の題材として、我々が注目すべきは労働生産力発展に関するケリーのリカード評である。ケリーはリカードの理論を解釈して、彼の地代理論に依れば労働生産力は文化の進歩ととも減少しなければならないことになるが、かかる結果を齎らす理論は当然誤謬であると言ふのである。だがリカードの理論の如何なる点に人類の進歩と共に労働の生産力が減少すると言ふ主張が含まれて居るのであろうか。成程リカードはその理論の説明に於て次のように言ふた。第一階級の土地のみが耕作さるゝときその全生産物一〇〇は労働者の手に帰する。然るに第二階級の土地が耕作され、そこに九〇の生産物が得らるる場合に於ては、第一階級の土地に一〇の地代が成立する。而してこの進行は順次に同一の方向に進むものであると言ふた。然しこのことが社会の進歩に伴う労働の生産力の進展を否定するものであると言ふが如き見方が果して正しいのであろうか。

リカードの理論は静態的理論である。故に彼はその理論構成に當つて出来得る限り条件の変化を避けているのである。我々はアダム・スミス以来資本主義的経済社会内部に於ける労働生産力発展の理論を説く所の正統派経済学派の重鎮たる彼が社会進歩に伴ふ労働生産力の進歩を否定したとは思はない。現に亦彼の著作の至る所に機械の發明や、分業の発達が如何に人間の生産能力を大ならしむるかと言つて居るのを見るのである。然し彼の理論は静態的理論なるが故にのみ、彼はこの労働生産力の進歩の問題を全く度外に棚置いたのである。この点に於てリカードが耕作順序の問題を説明の手段として用いたものであることが一層明らかに承認された様に思ふ。兎もあれリカードの理論は一定の社会があつて、そこには社会の必然的要求から各種の生産力を異にする土地が耕作されて居る。と言ふ事実を取つたにすぎないのである。従つてリカードはこの社会の諸条件の進歩によって、労働の生産力が増大するか否かと言ふ問題に

は全く触れ居てないのである。この点に於てケリーのリカード批評は再びその的をはづれて居るものと断定する外はない。

然しケリー自身の所説が全然誤謬であるかと言へばこの場合に於ても亦無下にそれを誤謬として避けることは不可能であろう。ケリーが言ふ様に人類文化の進歩に伴って労働の生産力は増大する。然し乍らその労働生産力の増加に応じて地代が減少するか何うかと言ふ問題は亦別種の問題であり、地代増減は当該社会の経済事情に依って異なるべく、当時のアメリカの如きに於ては恐らくそれが事実であったかも知れない。

かく見來るときリカードに対するケリーの批評は概してその核心に触れて居ないのであるが、去りとてケリー自身の理論が部分的には必ずしも誤謬でないと言ふことが明らかにされ得たと思ふ。そしてこの不可思議なる現象が現はれたと言ふ理由はターナーも言ふ如く、リカードの理論が静態的理論であるにも拘らずケリーの理論が不完全乍らも一種の動態理論であると言ふ一点に求められやうと思ふ。然しこの結末的論述にはいる前に、猶我々にはケリーの地代理論其物に就いて若干の批評を試みて置かなければならない。

ケリーの地代理論が要するに、地代＝利潤の理論、換言すれば所謂地代否定論であることは既に屢述べた所である。彼が恐らくはアメリカに特有なる耕作順序の問題を持ち來たことは明かにこの一点を合理的に説明せんが為であった。今此の点に就いてのケリーの説明を繰り返して見るならば次の如く要約されるであろう。土地自体は本来何等生産的なものではない。人間の労働が之に協力するに及んで始めて生産的となる。而して比較的瘦せた土地は自然の關係上開墾が便利であり、即ち労力を少なく要するが故に、又その収穫高も少ない。然るに一般的に見て優等地は開墾困難なものであるから、その収穫多しとするもそれは労働に対する報酬と見らるべきもので、土地の自然の豊度に帰せられるべきものではないと言ふのである。

然し乍らケリーの此の命題は決してそのまゝ認容することを許さない。第一に土地に投ふせられたる資本労働と、土地に包含さるゝと思はるゝ豊饒度とは果して一致するものであるか。即ち等しき資本と労働とを投じたる土地が常にその生産を等しくするか何うか。更に又一定年限内に資本が回収されたる後土地に豊度は果してなくなるであろうか。此の問題は更に深き検討を要するものである。ケリーの生活せる当時のアメリカの如く人口に比較して土地が有り余った時代ならば或は此の問題を輕視することも出来るであろう。併し既に數百年に亘って旧き文明を有し、人口の稠密なる地方に於ては、古き投下資本に対する利子として、差額地代を解釈することには多くの困難があると思ふ。

ケリーは以上の説明に依って明らかなるが如く、地代は結局投下資本に対する利子であるとの理論を樹てたのであるが、その理論は多くの点に於て不十分であり、誤謬をも含んで居る。従って彼の理論は当然更に発展せる形態に於て出現せなければならぬ運命にあったものである。少なくともその見解が何等かの真理を包含する限りに於てそれは出来得る限り完全なる形に展開せしめられなければならなかつた。而して此の役目を近代に於て務め上げたものは或はリービヒと稱することが出来るであろうか。

以上を以て我々は略ケリーの地代理論に関する批評を終わったと思ふ。そこで最後に何故ケリーに於てかゝる地代理論が生まれなければならなかつたかと言ふ、その時代的必然性に就いて若干の考察を加えて置きたい。

先づケリーの理論の特色はそれが全く一個の動態理論であると言ふことである。静態理論は

リカードに於て一応その極地に達し、それが又一応発達の頂点にあると見られた当時のイギリスに於て多分の妥当性を有したことは否定すべくもない。特に農業問題に於てはその感が深いのである。然るに此の理論はアメリカの当時の社会とは全く相容れない事情にあった。と言ふはけは当時のアメリカは漸く経済的発達の隆昌期に達し、社会経済事象は全く目まぐるしい転変を告げつつあった。従ってケリーにとっては経済法則の樹立に当って、その諸条件の進展を抑制する所に成立し得るが如き静態的見方は到底賛成することの出来ないものであった。彼の理論が動態的理論であることの社会的根拠は此処にあると思ふ。而して動態的理論として彼の理論は多くの誤謬を包蔵するけれども、猶当時のアメリカの経済理論としては見るべき多くのものを持つのである。さればリカード理論とケリーの理論とは全然別個の立場に立つものであって、一方の立場を以て慢然他方を非議することは出来ない。此我々が、ケリーのリカード批評が失当であるとしても、猶彼自身の立場には是認すべき点があり得ると称したわけである。さればケリーの理論を更に根本的に批評せんが為には突き進んで静態二態の方法論上の問題を取り扱はねばならないが、此の根本的問題の取扱は本小論の範囲外にあるからして今は割愛する。只ケリーは従来 of 古典派の方法論的立場を破って、新に動態理論を樹立せんとした所にも、その特異なる ■ ■ を認められなければならない。勿論彼自身がその点を認識して居たか否かは別問題として。

要するにケリーの地代論は如上の意味に於て学的価値を有するのである。即ちそれは一八三〇、四〇年代のアメリカの経済事情、思想的背景及彼の個人的環境を温床として発展せる理論で、只その時、処に於て相当なる妥当性を有するものである。故にケリーがその普遍妥当性を要求したことは確かに賢明ではなかったと思ふ。このことはアメリカ自身に於ても後年社会経済事情が異なるに従ってケリーと相反する理論が生れ来たことに照らしても明かにされると思ふ。ヘンリー・ジョージの有名なる著作「進歩と貧困」は同じくアメリカの土地に於て、ケリーに否定せられたリカードの地代論を根拠として世に公にされた。それは一八七九年のことで、ケリーの「経済原論」に後るゝこと僅かに四〇年である。僅かに四〇年の間にかゝる色彩を異にする理論が発生するに至ったことは、勿論一方当時のアメリカの社会進歩の速度が如何に急速であったかと言ふことを示し、ケリーに於て動学的理論の生れたる必然性を示すと共に、その理論の一時性をも示す様に思はれる。又何人も知るが如くジョージの「進歩と貧困」は土地の独占は社会進歩に従って、地代の取得を次第に増大し、労働及資本に対する分前を一向に増加しない、故に社会の進歩に基づくこの地代の増加は租税として国家に吸収さるべきであると言ふことを根底として居る。此の場合ジョージが土地独占の問題を持ち出したことはケリーと対象して注目すべき点である。即ちケリーに於ては未だ土地が自由財として取り扱はれたのであった。この辺にケリーとジョージの理論の時代的差異がある。ジョージの理論に対しては猶言ふべき多くを持つがこれは別として、兎もあれ、ケリーからジョージへのアメリカに於ける地代理論の変化は興味深きものたるを失はぬであろう。かくて我々は結局の所ケリーの理論は深く当時のアメリカの経済事情に根差して生れ出でたもので従って又その出現の意味の充分ありしことを知り得るのである。

(注)

- 1) 筆者が東浦庄治のご遺族である東浦めい氏をお訪ねしたのは、1987年の2月27日のことである。しかし、残念なことに東浦庄治にかかわる資料類はその前年に大半を処分されたとのことであった。ただその中で残されていたのが、この草稿と断片的な日記ほか若干の資料であり、その一切をお借りした。出来るだけ早い機会にと思いつつ、公表までに4年を経過してしまったことのお詫びを含め、資料をお貸しいただいた東浦めい氏に感謝の意を表したい。
- 2) 大内力は東浦の『日本農業概論』を、「『概論』は小さなものではあるが、戦前の日本農業分析としてもっともすぐれたもののひとつであろう」（東大経済学部『東大経済学部五十年史』東大出版会、1976年、328頁）ときわめて正当な評価を与えている。そうした文献が農文協の『昭和前期農政経済名著集』に含まれなかったのは、戦後の農業経済学の主流と東浦が方法・ビジョンにおいて大きく異なっていたことの結果であろう。
- 3) 4) 東浦庄治選集刊行会『日本農政論』農業評論社、「東浦庄治略歴」。
- 5) 「故東浦君の生涯の中で、思出の深い一つの事柄がある。たしか昭和10年末のことであった。当時の台湾帝国大学文政学部で農政学の教授を求めている。当時は台湾からの蓬莱米の移入が大量化して内地は豊作飢饉を云われた頃で、台湾農政の再検討を要求されていた。私はその仲介役の一人で東浦君を説得した。そしてその承諾をとうとう得ることが出来なかった。この時の同君の辞を未だに鮮やかに記憶する、『自分は生涯政府の禄をはずす民間人として活動したい』と。全くこの素志を貫いたのが同君であった」（東畑精一『わが師・わが友・わが学問』柏書房、1984年、140頁。）
- 6) 以上の経歴については、前掲「東浦庄治略歴」。なお、きわめて断片的ではあるが、日記が残されており、とくに戦時下の農業団体統合、及び敗戦直前の状況などに関して興味深い記述が見られる。これらも改めて公表を検討したい。
- 7) この表題は、当初「地代学説史研究」と書かれていたものが、「史」を斜線で消して「補遺」を書き加えていることが明かである。内容からして「地代学説史研究」の方が適当と思われるのに、なぜ東浦がそのような修正を行ったのか疑問となる点である。
- 8) 近藤康男編『農業経済研究入門（旧版）』東大出版会、1954年、5頁。
- 9) 栗原百寿『農業問題入門』著作集第 巻、校倉書房、1984年、19頁。
- 10) 近藤康男編『農業経済研究入門（新版）』東大出版会、1966年、6頁。
- 11) 日高普『地代論研究』時潮社、1962年、161頁、164頁。なお、ここで山田勝次郎を引合いに出したのは、阪本楠彦氏、梶井功氏などが近藤康男氏以上に山田勝次郎の影響を強く受けていると見るからである。
- 12) 栗原前掲書、同頁。なお、拙稿「農産物価格論」西田美昭他編『栗原百寿農業理論の射程』八潮社、1990年で栗原の名目地代論がマルクスの差額地代論の解釈論争から離れて、分割地所有の理論的・歴史的研究から導き出されていることを明らかにしたが、そうした栗原の名目地代論の意図もまさにこうした現実の地代現象に対する理論として位置づけられるのである。
- 13) もちろんこの二つの次元が全く無関係と言うのではない。区別されないところに混乱が生じ、両者とも不分明となるとともに、両者の関連も明かとならなかつたと言いたいのである。
- 14) このために阪本の系譜に立つ研究は、あたかも農業内に独自の法則性があるかのように農業だけが分析され、それを包み規定づけている資本主義との関係の分析がおろそかにされる傾向があったことが否めない。こうした中から、農家の経営分析から「P=利潤」を検出して、「資本家的経営だ」などという珍論も生まれることになった。
- 15) 近藤前掲書（新版）、24頁。
- 16) 同上書、27頁。
- 17) このように言っても、戦前来のソ連経由のマルクス経済学の圧倒的影響下で農業資本主義化論を唯一の農業理論と信じきって何十年も研究してきた研究者が多い日本の実状から言えば、このように簡単に言うてしまうことは反発を招くだけかもしれない。その点、今後別稿にて本格的に再検討してゆきたいと思うが、とりあえずは近く公表される予定の拙稿「農民層分解論の再検討のために一梶井功著『農業生産力の展開構造』を読み直す」を参照されたい。
- 18) 近藤前掲書（新版）、35頁。周知の様に、日本共産党の51年綱領の影響下に書かれた旧版では、阪本はこの項でスターリンによる農業集団化論を祖述している。しかし、問題は1966年に改訂され、ソ連の農業集団化のおそるべき実態が明かとなった70年代にも長く再版されている新版において

も、基本的な記述に変化がないことである。そこにも農業集団化がカウツキー・レーニンの農業資本主義化論の不可避的な帰結であることが強く影響しているのである。そうした内容のものが、権威ある出版社、编者による入門書として農業経済学の初学者に広く読まれて来たことは、農業経済学にとっては不幸なことであった。

- 19) 阪本楠彦『地代論講義』東大出版会、1978年、97頁。
- 20) 同上、118頁。
- 21) 同上、95頁。
- 22) 同上、80頁。
- 23) 大内力『経済学における古典と現代』東大出版会、1972年、212頁。
- 24) 同上、213頁。
- 25) 同上、128頁。
- 26) 同上、117頁。
- 27) 大内力『地代と土地所有』東大出版会、1958年、63～64頁。
- 28) 同上、223～224頁。
- 29) 大内『経済学における古典と現代』、139頁。
- 30) この点は、宇野弘藏も「しかし、資本主義の成立の基礎となる土地所有の確立は、単に『資本の競争自体』で発生史的に『論証』されるものといってよいであろうか」（『資本主義と土地所有』『宇野弘藏著作集』第4巻、岩波書店、1974年、398頁）と疑問を提出している。
- 31) 佐美光彦『世界資本主義』日本評論社、1980年、第1編第2章参照。近い将来に出版の予定されている佐美光彦氏の『経済原論』では、地代論は「純粋資本主義」の外で論じられることになるはずである。
- 32) このような純粋な論理の世界で地代論を扱うのでありながら、大内はその前提と食い違う現実の具体的な地代現象にその地代論を直接適用することに拘りが無い。大内力「価値法則と日本農業」前掲『地代と土地所有』、なお、この問題での鈴木鴻一郎との周知の論争については、拙稿「鈴木鴻一郎の日本農業論」『岡山大学経済学雑誌』第18巻第3号、1986年、及び拙稿「農産物価格論」西田美昭他編『栗原百寿農業理論の射程』八朔社、1990年を参照。
- 33) 栗原百寿は前掲拙稿「農産物価格論」で明らかにしたように、農産物価格を原論からぬき出した「C+V」ではなく、「農民的生活水準」で捉えようとしている。これは、先に述べた「名目地代論」同様、ジョーンズが小農地代を規定するものとした subsistence な自家労賃と共通する考え方であると言えよう。
- 34) 35) 前掲『日本農政論』、296、297頁。
- 36) なお、リチャード・ジョーンズに関する包括的な学説研究としては、大野精三郎『ジョーンズの経済学』岩波書店、1953年がほぼ唯一のものとしてある。
- 37) 東浦の原稿については、とりあえず手を入れることなく、原文のまま公表することとする。ただし、古い漢字はなるべく今日的に改めた。なお、□印は、原稿用紙における空白、■印は、判読出来ないことを示す。

Manuscripts on Rent Theory by HIGASHIURA Syouji
: An Introduction and a Comment (part 1)

Shinnosuke TAMA

Laboratory of Agricultural Economics

SUMMARY

This paper will introduce some manuscripts on rent theory written by HIGASHIURA Shoji. HIGASHIURA was an outstanding the most excellent agricultural economist and was also a powerful agricultural association leader in pre-World War II Japan. But he died just after defeat the War leaving his manuscripts on rent theory in the hands of his daughter, unpublished.

Studies on rent theory after WWII in Japan concentrated on the rent theory of K. MARX. However, leading scholars returned to theory of A. RICARDO as the result of thier study of MARX. The manuscripts of HIGASHIURA, on the contrary, focussed on the critics of RICARDO's theory, thus enabling HIGASHIURA to relativize RICARDO's theory. That is the reason why this paper is bringing the manuscripts of HIGASHIURA before the public eye a half century after they were written.

This paper will introduce two chapters ; one on the rent theory of Richard Jhonse, another on the rent theory of Henry Carey. The former criticized RICARDO's rent theory from a peasant rent point of view, and the latter criticized RICARDO from a dynamics point of view.

Bull. Fac. Agric. Hirosaki Univ. No. 54 : 1-31, 1991.